

御伽草子『鉢かづき』バーク本の位置付け

小 澤 真 未

はじめに

室町時代末の成立とされる作者不詳の物語『鉢かづき』は渋川版（御伽文庫）の一編で、亡き実母によって頭に鉢を被せられ「鉢かづき」と呼ばれるようになった娘が、継母からのいじめによって屋敷を追われるものの、拾われた先で恋に落ち、恋の成就によって鉢が割れて末永く栄華を極める物語である。

『鉢かづき』は非常に多くの伝本を持つ。多くの板本、写本は御伽文庫本と同一の内容を保持しており、これらは流布本系統とされている¹⁾。一方で流布本系統とは内容や文体が大きく異なる本文を持ち、異本と称される御巫本系統の諸本や、バーク本と呼称される諸本の存在も確認されている。バーク本については、小林健二氏が「甘日榛本・清水本・御巫本の系統をⅠ類本、古写本から古活字本・版本と流れる諸本をⅡ類」としたうえで以下のように述べている²⁾。

ここに翻刻紹介するバーク・コレクション本（以下、バーク本と略称）も、御巫本系の構成を有しており、この系統では六本目の伝本ということになる。ただし、御巫本の系統に連なるものの他本とはかなり異なった本文を持ち、御巫本系統のなかで

も特異な本として位置付けられるものである。（中略）バーク本は、Ⅰ類本の御巫本系の構造を持ちながら、本文はⅡ類本の御伽文庫本など流布本系との混態をなす。これまで、このように顕著なⅠ類本とⅡ類本の混態本文はなかったもので、「鉢かづき」の流布を考える上で貴重な一本となる。

バーク本は、御巫本の構造を持ちながら御伽文庫本の内容をも有していることが認められており、両系統の中間形態として位置づけられているのである。またバーク本の存在は、江戸初期の段階で既にⅠ類本とⅡ類本が交渉を持っていたことを示す貴重な資料であるというのだ。さらに小林氏はバーク本について五点の特徴（Ⅰ類本、Ⅱ類本との相違も含む）を挙げているものの「それらの考察についてはまた後日を期したい」として詳細には言及していないため、バーク本における御伽文庫本と御巫本それぞれとの相違の明確化、これを踏まえたバーク本の位置づけの再検討が必要である。

本稿では、二系統の中間形態として位置づけられてきたバーク本を主軸に据えての三本の内容比較、比較結果をもとにした三本の主題考察、そして中間形態というバーク本の従来の位置付けの再検討を行う。

本稿での本文の引用は、流布本系統に『鉢かづき 日本古典文学大系38』（以下「御伽文庫本」）、御巫本系統に『はちかつき 室町時代物語集 第三』（以下「御巫本」）、中間形態に『バーク・コレクション蔵「鉢かづき物語」―翻刻と解題―』（以下「バーク本」）に依り、私に傍線や記号を付した。

一 上巻比較

（一）姫君懷妊と実母の死

『鉢かづき』は、三本とも共通して子を持たない夫婦の登場によって物語が始まる。

御巫本とバーク本はともに、子の無いことを嘆いた夫婦が寺へ参籠して観音による夢想を受け、夫婦の祈りの強さによって子を授かるのだが、御伽文庫本では夫婦による寺への参籠や観音による夢想は描かれず、懷妊については「いかなることにや、姫君一人まふけ給」と描写されるのみである。長谷観音へ祈願する場面は存在するもののそれは懷妊後で、夫婦が「姫君の末繁盛の果報あらせ給へ」と祈るものである。御伽文庫本は他の二本とは異なり、子を授かることができた理由が明確ではない。

御巫本とバーク本は、参籠先の寺、夫婦の前世や鉢箱についての記述の有無、お告げにおける母君の死期という三項目の異同が挙げられるものの物語の大筋は一致する。姫君懷妊の場面においてバーク本と近い内容を持つのは御巫本である。懷妊が夫婦の祈りと観音の示現に依るという点から長谷観音の靈驗、姫君が「申し子」であることを強調する意図が読み取れよう。一方の御伽文庫本における懷妊は脈絡のない唐突なものであり、靈驗を絡ませていない。

夫婦が姫君を授かった後は、観音による夢想の有無にかかわらず三本に共通して姫君の実母の死が描かれる。実母の死については次の三点が相違点として挙げられよう。

- ・実父による看病の描写の有無
- ・お告げと実母の死との整合性

・御伽文庫本とバーク本の本文の酷似

まず一点目に挙げた姫君の実父による看病の描写は、御巫本・バーク本には存在し、御伽文庫本には存在しない。看病の様子が描かれる二本についてもその描写は同一ではなく、御巫本では高僧に「大ほう、ひほう」を執り行わせるという具体的な行動が描かれているのに対し、バーク本では「さま／＼あつかひたまへともさらにしるしもあります」という記述のみである。実父の具体的な行動は描かれていない。

二点目の相違である観音によるお告げと実母の死の時期の整合性については表1の通りである。御伽文庫本は夢想の場面を有しておらず、実母の死の時期との整合性は検討できないが、実母の死の時期が他の二本と異なっていることが分かる。お告げを有する二本では、御巫本がお告げの内容と実母の死の時期が一致するのに対して、バーク本では一致しない。

三点目の御伽文庫本とバーク本の本文の酷似については、該当部分を次に引用する。

傍なる手箱を取りだし、中には何をか入れられけん、世に重げなるを姫君の御ぐしにいたゞかせ、その上に肩の隠るゝ程の鉢をきせ参らせて、母上かくこそ詠じ給ける。

（御伽文庫本 五九頁・六十一行）

【表1】冒頭から実母の死までの三本比較

	懐妊理由	参覧先	長谷観音への祈願	祈願内容	母の死期	夫婦の前世	鉢箱の授受
御伽文庫本	不明確	×	姫君誕生後	姫君の将来繁盛	お告げ：なし 死期：姫君十三歳時	×	×
御巫本	夫婦による参覧 観音による示現	清水寺→ 長谷寺	姫君懐妊前	懐妊	お告げ：姫君七歳時 死期：姫君七歳の春	○	○
パーク本	夫婦による参覧 観音による示現	長谷寺→ 長谷寺	姫君懐妊前	懐妊	お告げ：姫君三歳時 死期：姫君七歳の秋	×	×

そばなる手箱をとりだし、中にはなにをか入れけん、よにおもげなるをひめ君の御ぐしにいたゝかせ、そのうへに、かたのかくる、ほどなる「はち」をうちきせまいらせて、は、うへかくぞ、よみたまひける。（パーク本 一四〇頁・一二三行）
助詞、接頭語、動詞に四箇所の違いがみられるものの、ほぼ同一の文を有している。実母が死の間際に詠む和歌も共通していることから、当該場面では御伽文庫本とパーク本が酷似した本文と等しい展開を持っているといえよう。

（2）継子いじめ

鉢を被り続ける姫君は実母亡き後、継母からいじめを受ける。三本に共通して姫君は実母の死後から「鉢かづき」と記されるため、本稿も以下姫君を「鉢かづき」と呼ぶ。

継子いじめに関する三本の相違点は

- ・実父が継母の讒言を信じるまでの物語展開の数
- ・実父の薄情さ
- ・継母の性格

の三点である。比較に関わる項目を表2にまとめた。御伽文庫本は三本の中で最も物語展開が少ない。継母を迎え、鉢かづきへのいじめが始まってまもなく、継母による一度目の讒言があり、それを信じた実父が鉢かづきを屋敷から追い出している。その不自然さを補うためか、筆者によって「おとこの心のはかなきは、此ほとのこと、まことと思ふて」という一文が付与されているのである。実父による継母への賛同が早いことから、実父の頼りなさが顕著に表されている本文であるといえるだろう。

これに対して御巫本では、実父が継母を信じるまでの展開は少ないものの、信じたからといって鉢かづきを追放したり勘当したりはしない点が他の二本とは異なっている。実父は継母からの讒言の内容を信じて鉢かづきを窘めるものの、鉢かづきを責めることや継母の要求に応じることはせずに、泣く泣く鉢かづきを屋敷から逃がすことを決断する。継母によってではなく讒言を信じた実父の手で鉢かづきが排除される他の二本と比べると、実子への愛情が強く示されている。しかしながら実父の決断通りに事は進まず、継母が実父に先回りして鉢かづきを四辻へと捨ててしまう。自分の知らぬ間に鉢かづきが捨て置かれたことを知った実父はひどく悲しみ、乳母とともに鉢かづきを探すものの見つかることはできなかった。

以上の展開から、実子を大切に想いつつも継母を説き伏せることはできない気弱な実父像を読み取ることができる。一方の継母は、鉢かづきを無理やり人目につかせ、彼女の心の拠り所である実母の墓前参上を「ふしづけ」にして命を奪うと脅して禁ずるなど、鉢かづきの希望を一つずつ潰していく残酷ないじめを行う人物として描かれている。御巫本は、実子を愛し守ろうとする実父と、実父の賛同のないままに継子を追放し、鉢かづきの希望に反することをしして追い詰めていく強硬な継母との対比によって、実父から実子への愛情を強調しているといえよう。

最後にパーク本は、一度目の讒言で鉢かづきが追放を免れることで、鉢かづき追放に至る過程に多くの物語展開を有している。実父による鉢かづきへの愛情が一度目の追放を退けたのであれば、パーク本も御巫本同様に父子愛が強調されるテキストとしての特徴を持つ。しかしながら鉢かづきが一度目に追放を免れたのは、実父が鉢

かづきを信じていたからではない。一度目の讒言を受けて言葉もなく涙ぐむだけの実父の様子からも、彼が継母の讒言を疑い鉢かづきを信じたと読むことは難しいのである。では何が鉢かづきを追放から守ったのか。ここで讒言を行う継母に対する鉢かづきの心情に着目したい。次に引用するのは、讒言を行う継母を前にした鉢かづきの様子である。

はちかづきは、まことの、ならぬ身のかなしさは、あらぬ事をゆいつけるよ、と思召けれども、とかくの事をものたまはず
(一四二頁・八〇九行)

この一文によって、鉢かづきがいじめを企てる継母の心情を読み取っていることが窺えるのである。このような継母に対する鉢かづきの心中描写は他の二本には見られない。讒言に対する反論は得策ではないと判断し、片輪者である身の辛さを語ることで一旦は屋敷からの追放を免れている点からも、他の二本に描かれる他者の言いなりである鉢かづきと比べて、パーク本の鉢かづきからは「主体性」が看取でき、これが一度目の追放を避けたと読むことができるのだ。パーク本で描かれる、継母が鉢かづきを責め立てている横で涙ぐむことしかできず、継母の涙に騙されて鉢かづきに勘当を申し渡す実父の様子からは、御伽文庫本や御巫本の実父とは異なる気弱さが読み取れよう。さらに、パーク本だけが有する「たばかりすましけるよ」という継母の心情描写には、継母が謀を企てて実父を騙そうとしている様子が明示されている。これによって、巧妙な企てで実父を翻弄する小賢しい継母像が浮かび上がっている。

【表2】継子いじめ比較

	継子いじめの種類	実父の反応	物語展開	実父に対する地の文
御伽文庫本	<ul style="list-style-type: none"> ・初対面で「片輪者」 ・実子懐妊後に無視 ・嘘ばかり告げ口 ・幕前参上を呪いだと言言を行う ・装束を剥ぎ取り屋敷から追い出す 	<ul style="list-style-type: none"> ・継母の讒言を信じる ・自ら鉢かづきを屋敷から追い出す 	少ない	「男の心のはかなは、まこと、思ひ」
御巫本	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの世話をさせない ・脅迫して幕前参上をやめさせる ・讒言し追放を要求 ・実父に先回りして四辻に捨てる 	<ul style="list-style-type: none"> ・継母を信じるが要求には応じない ・鉢かづきを逃がそうとする ・追放された鉢かづきを探す 	中間	なし
パーク本	<ul style="list-style-type: none"> ・初対面で「片輪者」 ・実子懐妊後に無視 ・嘘ばかり告げ口 ・幕前参上を呪いだと言言を行う ・鉢かづきを呼び出し責め立てる ・使用人を巻き込んで冷遇 ・父へ嘘泣きをして讒言を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・一度目の讒言に涙ぐむ ・継母による二度目の讒言と嘘泣きを信じる ・鉢かづきを屋敷から追い出す 	多い	「いゑたかももろに、うちなみたくみたまふぞ、はかなき」

二 下巻比較

(1) 男主人公との出会い

自邸を追われた鉢かづきは人里へと迷い着く。そこで男主人公の父と出会い、彼の屋敷で湯殿として働くこととなり男主人公との出会いを果たす。

御伽文庫本のみ、自邸を追われて人里へと辿り着く前に〈入水〉の場面が付与される。絶望の渦中にいる鉢かづきは大きな川へと辿り着き、そこで目にした岸打つ波に対して幼心から恐怖心を抱く。しかしながら実母への思慕と逃避への期待が恐怖心を上回り、鉢かづきは一首の和歌を詠んだ後に川へと身投げを図るのである。

御巫本・パーク本においても川に沈む場面は存在する。しかしながら、それは男主人公と鉢かづきの出会いの後に描かれる上に入水ではない。二人が恋に落ち、その関係を耳にした男主人公の父が、男主人公に黙って鉢かづきを盗ませて淀川へ投げ入れるという〈鉢かづき淀川追放〉の場面である。御伽文庫本における入水の場面との共通点としては次の三つが挙げられる。

- ・鉢の水面に浮く力によって命が助かる点
 - ・舟人が鉢だと思い鉢かづきを引き上げる点
 - ・舟人が鉢かづきに驚いて鉢かづきを岸に投げ上げる点
- 重複する印象を与えることを避けるために御伽文庫本では入水の場面だけが、他の二本では鉢かづき淀川追放の場面だけが描かれたと考えられるが、ではなぜ御伽文庫本では後の淀川追放の場面ではなく自邸を追われた直後の入水が描かれたのだろうか。

他者によって川へ投げ入れられる場面よりも、自身の意志で命を

投げ出そうとする場面の方が、鉢かづきの絶望をより深く描くことができる。さらに、亡き実母との再会という入水の目的は鉢かづきの実母に対する思慕の念を強調する。読者に対して鉢かづきへの同情心を掻き立てる効果も期待できよう。入水場面を付与することにより、御伽文庫本の物語展開は劇的なものと彩られているのである。

これら三本に共通し、男主人公は湯殿として働く鉢かづきと出会う。出会いの場や契機が明確に描かれている点、物語展開や詠まれる和歌が共通している点から、出会いの場面については御伽文庫本・バーク本が類似している。男主人公が一目で恋に落ちるところに運命性や物語性を感じさせる二本は、『鉢かづき』を恋物語として享受する読者の嗜好を満たす本文であるといえよう。

これに対して御巫本では、男主人公と鉢かづきとの出会いに関する明確な状況や契機が描かれない。代わりに、他の二本に比して鉢かづきの所作や体の端々の美しさを称賛する声が多く描かれている。それゆえ鉢かづきの美貌に関する噂は広がりを見せ、男主人公の耳にも届いていたと読むことができる。男主人公が初めから「噂の美女」というフィルターで鉢かづきを見ており興味を惹かれたという御巫本には、運命的ではないものの、現実的な恋の始まりを認めることができる。

(2) 恋の進展と阻害

続く恋の進展についても、御伽文庫本とバーク本とが等しい展開を有しており、出会いの場で恋心を抱いた男主人公がその場で鉢かづきへと愛を伝えて契りを結ぶ。特に御伽文庫本では、情熱的に鉢

かづきへの愛を伝える男主人公と我が身の恥ずかしさからそれを受け入れることのできない鉢かづきとの心のすれ違いが描かれており、二人の恋が成就するかどうか読者をやきもきさせる。さらに、歌語や雅語を多用した文体によつて、契りを結んだ後の鉢かづきの苦悩や二人の心の距離が近づいていく過程も紙幅を費やして描かれている。その美麗さと、多くの展開や心情を描写することによって生まれるドラマ性が御伽文庫本の恋の進展における特徴であるといえよう。

一方のバーク本は、展開が御伽文庫本と等しいものの、男主人公からの想いに苦悩する鉢かづきの様子や、契りを結んだ後の苦悩や二人の心の距離が近付いていく様子は描かれない。契りを結んだ後の様子は次の二行に終始する。

かくてそれよりは、日のくるゝをまちわび、よなく／＼かよはせ
たまひて、あさからぬ御ちぎり、中「々」いわんかたなし。

(一四六頁・十一～十三行)

鉢かづきの心情描写の欠如や展開の少なさから、御伽文庫本を簡略化したような本文であるという印象を受ける。しかしながら、慎ましいはずの男主人公が鉢かづきへと情熱的に愛を伝えて人目も憚らずに通う状況が描かれおり、恋物語としての見せ場は有しているため、描写自体は簡略化されているものの、その分二人の仲は急速に深まっている。

出会いの場では恋に発展しない御巫本では、ともに時間を過ごし言葉を交わす中で男主人公から鉢かづきへの気持ちが悪へと移り変わっていく様子が描かれる。時間をかけて愛を育むという特徴的な内容を有しながら、一方で契りに関する明確な記述はなく、時

間をかけて関係が深まっていくにもかかわらず恋の進展に割く筆の量は少ない。鉢かづきの心情の変化や恋心の揺らぎも描かれない御巫本は、恋物語としては淡白な本文を有しているといえるだろう。

鉢かづきと男主人公との恋が露見することによって発生する、第三者による阻害は次の通りである。

- ・ 御伽文庫本……(一)乳母による男主人公訪問 (二)嫁比べ画策
- ・ パーク本……(一)鉢かづき淀川追放 (二)嫁比べ画策

共通して二つ目の阻害として描かれる〈嫁比べ画策〉では、画策者である男主人公の親が断罪の対象とする人物が三本で異なり、これは二人の恋が露見した際に周囲が非難する対象と一致する。御伽文庫本では二人の恋が露見した際に、男主人公へ近づいた鉢かづきが非難される。その後画策される嫁比べについても、鉢かづきに身の程を思い知らせることで屋敷から追い出すことを目的としており、断罪の対象は鉢かづき一人なのである。あくまでも嫁比べは、親の手によって片輪者である鉢かづきから息子を守るための方策として描かれている。

これに対して御巫本とパーク本では、二人の恋を阻害する人々が卑しい片輪者に目をかけた男主人公の行為を非難する。嫁比べも、鉢かづきと男主人公の二人に恥をかかせ、卑しい者に通う男主人公を断罪するための方策として描かれる。鉢かづきと男主人公は二人一緒に追いつめられるのである。二人が共に断罪される御巫本・パーク本よりも、鉢かづき一人が断罪の対象である御伽文庫本の方が、二人の別離の危機感を感じさせる効果は強い。この効果によって、恋物語として先の展開への期待感をより強く持たせているとい

える。

(3) 鉢の落下と嫁比べ

二人が嫁比べの画策によって屋敷を後にすることを決めた時、鉢は落下する。『鉢かづき』のクライマックスである鉢が落下する契機も三本で異なっている。鉢の落下後の鉢かづきは「姫君」と呼称されているため、本稿もこれに倣う。

相違点として、御巫本とパーク本には祈りの場面が存在し、御伽文庫本には存在しない点が挙げられる。御巫本では両親が信仰した長谷観音に鉢かづきが死を願うと、その代わりに鉢が割れて前へと落ちる。パーク本も同様に鉢かづきが長谷観音へと祈念する。しかし、祈りの内容は鉢が取れることであり、直接的な願いが受納されて鉢が落ちる形をとる。祈願内容は異なるものの、祈りの対象はともに長谷観音であり、その庇護によって鉢が落ちたという展開に違いはない。二本は長谷観音の靈験を強調しているといえよう。

一方の御伽文庫本では、和歌を用いて情趣豊かに二人が愛を誓い合い、どこまでも運命を共にする覚悟を示した瞬間に鉢が割れて落ちる。男主人公と鉢かづきとの揺るぎない愛が鉢を落下させたと読むことができる。三本の中で最も二人の愛が強調されている一方で、靈験に重きを置いていない本文だといえる。

続く嫁比べの場面に於いても、三本ともに同様の特徴が見られる。御巫本では、姫君の本来の姿を目の当たりにした男主人公の父は、姫君の出自に興味を持つ。出自を問われた姫君が長谷観音の申し子である身を告白し、これを聞いた男主人公の父は結婚を認める。出自の告白が男主人公の父が姫君を嫁と認める契機となることから、

姫君が長谷観音の申し子であることによる天与の福分が姫君へ嫁の地位を獲得させたといえよう。ここでも長谷観音の靈驗に重きを置いている御巫本の特徴が認められる。

パーク本では、姫君の容姿の美しさや引き出物の豪華さなどの嫁比べにおける勝利を契機として、二人の結婚が認められる。自身的美貌と引き出物の豪華さだけで妻の座を獲得するパーク本は、些か短絡的な物語展開を有しているように思われるが、姫君のあらわになった美貌も豪華な引出物も長谷観音の靈驗による鉢の落下から得られたものである。やはり長谷観音の利益が皆に姫君を認めさせた^{と読むことができるのである。}

一方御伽文庫本では、姫君が装束や引き出物の豪華さで男主人公の兄嫁らに勝利を収めた後に、姫君の〈能力比べ〉が行われ、これによって姫君の教養の高さが露見し、皆が姫君を男主人公の嫁として認めることとなる。和琴を奏でる直前の姫君の心中からは、能力比べにおいて披露される姫君の教養の高さが亡き実母による教育の賜物であることが分かる。実母からの姫君への愛情を読み取ることができよう。御伽文庫本は靈驗に重きを置かず、愛を強調する本文を持つという特徴がここにも表れている。

(4) 幸福の完成

男主人公の妻の座を獲得することが姫君の幸福に直結するテキストもあれば、結婚だけでは幸福が完成しないテキストも存在する。

御伽文庫本では実父との再会を願う姫君の屈託が描かれ、妻の座の獲得だけでは幸福は完成しない。子から親、親から子への強い想いが引き起こす奇跡的な再会を経て、初めて姫君の幸福が完成する

のである。ここでも御伽文庫本特有の劇的な物語展開が繰り広げられているといえよう。

御巫本では、姫君の実父が男主人公とともに位を与えられる形で登場する。些か唐突な登場を見せる実父だが、これは姫君が嫁比べの場において本当の出自を告白したことで実父の存在が明らかとなったことに依る。姫君が出自を告白する唯一のテキストである御巫本でのみ描かれ得る登場の仕方である。姫君の屈託や実父への視点の移動、再会を喜ぶ場面が欠如しているため、御伽文庫本と比較すると淡泊な物語展開に感じられる。鉢かづきが自邸を追われた後にも唯一実父が鉢かづきを想い続けていた御巫本にしては、姫君から実父への孝心が深くは描かれていない点に少々不審が残る。

パーク本は、嫁比べ後に唯一姫君の実父が登場しない。姫君の屈託も描かれなため、妻の座の獲得が直ちに姫君の幸福を完成させている。物語の最後に父子の再会を描く手法はパーク本成立以前に多く見られる手法であるため、省かれた可能性は否定できない。実父が再登場せず故郷の状況が全く描かれなため、他の二本と比べると未完結な印象を禁じ得ないが、姫君の幸福の完成は姫君自身の地位や栄華に直結しているという最も簡潔な展開を有するテキストであるといえるだろう。

三 パーク本の位置づけ

(1) 御伽文庫本・御巫本の主題

以上の三本の比較から、御伽文庫本は多くの和歌を盛り込んだ美麗で豊富な文体によって劇的な物語展開を作り上げているという特徴を有していること、そしてその劇的な物語展開を以て、子から親

への孝心、そして親から子への愛情という主題を持つことが明らかである。

御巫本については、「子宝に恵まれない夫婦が神仏に祈願し、子供を授かる話」³⁾と定義付けられる「申し子譚」たる要素を有しているとともに、長谷観音の靈験と姫君の申し子性が強調されていることから、長谷観音の靈験を主題とする「申し子譚」であると考えられる。

(2) バーク本

御伽文庫本と御巫本の中間形態とされてきたバーク本は、双方の主題を併せ持つのか。これを検証するためにバーク本の位置づけについての再検討を行う。

比較を通して得られた物語全体における場面毎のバーク本の傾向を表3にまとめた。物語を通して御伽文庫本・御巫本どちらかに偏ることなく両者の要素を一律に取り入れていることが分かる。バーク本はまさに二本の混態を為しているテキストであり、御伽文庫本と御巫本の中間形態であるという既存の見解も肯定されよう。

しかしながらバーク本の位置づけはこれに終始しない。物語全体において物語が大きく展開する継子いじめ、嫁比べの場面においてバーク本が御伽文庫本と御巫本のどちらにも似通わない独自の展開を有しているからである。継子いじめについては、富田成美氏が『鉢かづき』に継子いじめの要素が組み込まれた理由として次の三点を挙げている。⁴⁾

一つには、古くから愛好された要素を摂取することによって、享受者の嗜好を満足させる意図が考えられる。「継子譚」が主

【表3】場面「ことに見るバーク本の類似傾向

上巻		巻	場面	類似本
下巻				
姫君懐妊	継子いじめ	四辻放浪	御巫本	独自の展開
実母の死	男主人公の父との出会い	男主人公との出会い	御伽文庫本	
	恋の進展	恋の阻害	御伽文庫本	
	恋の阻害	鉢の落下	御巫本	
	嫁くらべ	幸福の完成	独自の展開	

人公の放浪、苦難をへて祝言へ収斂する構図をもつことは、共通の認識である。そのため、(中略)「有効な物語展開の手法」として活用できる。しかしそれだけではない。(中略)人の「絆」は逆境にあるほど固く結ばれる。継子にとつては、「継子いじめ」は最大の逆境である。実母子の精神的結合の強さを示すうえからも、実態は異なるが、「継子譚」を要素として残すことは効果的であると言える。

『鉢かづき』における継子いじめの描写は読者の感興へ大いに影響するとともに、物語の展開を左右するということである。実際に、三本でいじめの描かれ方が異なることによって、読者が享受する継

母像や実父像にも三本毎に違いが見られることを前述した。継子いじめの描かれ方から見出される独自性は、テキスト毎の特徴や印象に大きく影響を及ぼしている。

嫁比べの場面については、御伽文庫本では実母から姫君への愛情が明らかとなり妻の座の獲得へと繋がる点から、主題を強調している場面であるといえ、御巫本では姫君が申し子であることが露見して妻の座の獲得へと繋がる点から、「申し子譚」としての特徴が表れている場面であるといえる。つまり、嫁比べの場面は各テキストにおいて主題がより色濃く表される場面である。そのような重要な場面においてバーク本が他の二本と異なる独自の展開を有していることは、バーク本が二本の寄せ集めとしての中間形態ではなく、独自性を持った新たな「第三のテキスト」であることの証明になるといえる。

独自性を持った新たなテキストとして位置づけられるバーク本であるからこそ、他の二本とは異なる主題が存在し得る。稿者はバーク本の主題は、長谷観音の利生であると考える。根拠は数々の場面で見受けられるバーク本の「簡略化」という特徴にある。バーク本の冒頭では、二つの寺に参籠する御巫本を簡略化したかのように長谷寺への参籠だけが描かれる。長谷観音の靈験によつて姫君を授かったことを描くのであれば、他の寺への参籠は不要なのだ。恋の進展模様については、御伽文庫本の劇的な描写を短縮したかのような本文を有しており、主題に沿わない恋物語としての見せ場は淡泊に描写するにとどめている。

一方で、本文全体で淡泊な表現が用いられているわけではなく、鉢の落下に際しては長谷観音へ真摯に祈る鉢かづきの様子と祈りの

受納の場面が劇的に描写される。長谷観音の利生による事柄は鮮明に描き、強調しているのである。嫁比べの場面では、御伽文庫本のように実母から鉢かづきへの愛が強調されるわけではない。御巫本のように申し子であることが露見することもなく、ただ姫君の美貌や装束の豪華さに対する称賛が妻の座の獲得の契機となるように描かれている。これは前述したように、鉢の落下によつて手に入った装飾品の力、つまり長谷観音の力を以て姫君が幸福を完成させたことと読ませることを意図した展開だといえるだろう。

これらの特徴から、バーク本は長谷観音の靈験、利生に関わる描写に紙幅を費やす一方でそれ以外の部分を省いた結果、簡略化したかのような本文になっているといえる。御伽文庫本と御巫本双方の特徴を併せ持ちながらも、独自の展開や不要な描写を省き簡略化させることで、長谷観音の利生という主題を浮き上がらせているのである。

おわりに

本稿では、御伽草子『鉢かづき』の三つのテキスト、御伽文庫本、御巫本、バーク本の内容比較を行うことで、三本の主題を考察し、従来御伽文庫本と御巫本の中間形態とされてきたバーク本の位置付けを再検討した。

子から親への孝心、そして親から子への愛情を主題とする御伽文庫本。長谷観音の靈験を主題とする御巫本。そして比較を通して明らかとなった他の二本への類似傾向から、御伽文庫本と御巫本の特徴を併せ持つだけの中間形態ではなく、独自性を持った新たなテキストとしての位置づけを獲得し得るバーク本。これは長谷観音の靈

験や利生に関わらない部分は簡略化するという構造から、主題は長谷観音の利生であると結論付けた。

室町時代末の成立とされる御伽草子『鉢かづき』は多くの伝本を持ち、本稿では比較によって同じ一つの作品であってもテキスト毎に表される主題が異なることを示した。バーク本が江戸初期の段階でのⅠ類本とⅡ類本の交渉を示す資料であることから、多くの伝本の存在、そしてそれらの交渉が異なる描写と展開を生み出し、『鉢かづき』に二様ではない主題を表現させているのである。多くの諸本が異なる主題を有することは『鉢かづき』という一つの作品が読者に新たな感興を与え続ける要因となり、本作が広く愛される理由の一つであったと考えられる。

注(1) 松本隆信「御伽草子本の本文について(二)―鉢かづきの草子」(斯道文庫論集(三) 163頁226ページ、一九六四年三月、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫)

- (2) 小林健二『バーク・コレクション蔵「鉢かづき物語」―翻刻と解題―』(国文学研究資料館紀要文学研究篇36、131頁152ページ、二〇一〇年三月)
- (3) 徳田和夫『お伽草子事典』(東京堂出版、二〇〇二年九月、108ページ「申し子説話」)
- (4) 富田成美『鉢かづきの母子像―鉢に見る「絆」―』(『日本大学』47巻9号、19頁29ページ、一九九八年九月、日本文学協会)

受贈雑誌(二)

金沢大学国語国文
かほより

金沢大学国語国文学会

武庫川女子大学大学院文学研究
科・日本語日本文学専攻院生研
究会

岐阜聖徳学園大学国語国文学
京都語文

岐阜聖徳学園大学国語国文学会
佛教大学国語国文学会

京都大学国文学論叢

京都大学大学院文学研究科国語
国文学研究室

キリスト教文学研究

日本キリスト教文学会

金城日本語日本文化

金城学院大学日本語日本文化学
会

近代

神戸大学「近代」発行会

群馬県立女子大学国文学研究

群馬県立女子大学国語国文学会

藝文研究

慶應義塾大学藝文学会

言語表現研究

兵庫教育大学言語表現学会

現代日本語研究

大阪大学大学院文学研究科 日
本語学講座 現代日本語学研究
室

高知大國文
國學院雑誌

高知大学国語国文学会
國學院大學